

平和の死 中村光夫

平和の死 中村光夫



平和の死

昭和四十八年二月二十八日 第一刷発行

著者 中村光夫

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二 郵便番号 一一二

電話 東京 (〇三) 九四五一一一一 (大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 七六〇円 落丁本、乱丁本はおとりかえいたします。

© 中村光夫 昭和四十八年 Printed in Japan

平和の死

装帧·伊藤憲治

パリの街は灰色だ。思いのほか汚い。朝七時のリヨン駅前はずいぶん目をさましかけた様子で、夜あかしらしいカフェが二三軒戸をあけているだけだ。どことなく厨房の匂いが漂ってくる。

ここは場末なのかしら、昨日見物したマルセーユの繁華街の方がずっと立派だ、と思っているうちに、タクシーは橋をわたって、黄葉した並木の美しい河岸通りにでた。

左手の黒くくすんだ建物に、灰色の空から細かな雨がふっていた。右側の石垣の間を流れる河は、ミルクを入れすぎたコーヒーのように濁っている。

「おい、ノオトル・ダムだ。」

増田がとなりにすわっている昌一の膝をついた。

「うん。」

昌一はさっきから気付いていた。橋をわたるとき、右手に二つ並んだ塔の頂をみとめ、その方に車が行くのをひそかに期待して、やがて狭くなった河を前景に、写真で見馴れた十三世紀の伽藍の、雨にぬれた黒灰色の石肌が近づいてくるのに、動悸がたかまるのを感じていた。

「ちょっと降りてみようか。」

増田が昌一の氣持を察したように云った。

「うん。」

昌一は運転台の横に坐っている桜井の横顔をみながら、あいまいな調子で答えた。

「いま降りなくてもいいだろう。これから二年もいるんだから。」

桜井は果して反対した。

「いや、写真をとりたいんだ。今日の記念にさ。」

増田はこういうと、すぐ運転手に車をとめるように命じた。

「いそいでくれよ、写真をとるなら。どうもこいつはいんちきらしい。ぐずぐずしていると、うんとぼられるかも知れないから。」

桜井は車を降りようとせず、となりの運転手の顔をみながら云って、駅から大学都市まで順路を行けば、ノオトル・ダム寺院のそばを通る筈はないとつけ加えた。

彼は昨夜、汽車のなかで、バリの地図をだして、しきりに調べていた。

二人はだまって車をはなれ、黒い石橋の畔にたつて、川を見下し、寺院を見あげた。水と石と空とがつくりだす、不思議な諧和の世界がそこにあった。雨にぬれ、鮮やかに黄葉した幾本かの老樹も鉱物のような印象だった。

「いいね。」

ふたりはしばらく身動きしなかった。増田は写真機を額にあてて、申訳のように、二三枚うつ

した。

「降りてよかった。おかげで。」

昌一は車にもどりながら、増田に頭をさげた。増田はわきをむいて、何も答えなかった。

印度洋をこえる四十日の船旅の間に、こんな場面が何度あったろう。彼ら三人は、フランス政府から、給費をうける留学生であった。採用の人数も少なく、とくに支那事変が全面戦争の様相をおび、日本とフランスの關係が悪化するにつれて、そのわずかな人数も減らされがちだったが、それでも、この制度はもう十年近く続いて、今年も四人採用になった。

ただし、そのひとりにはバリ在住の画家が選ばれたので、日本から行くのは三人で、文科系は昌一だけだった。

桜井も増田も医者で、年も昌一より、三つほど上であった。

神戸ではじめて紹介され、同じ船室に投げこまれたとき、昌一はまったく別世界の人たちと起居をともにする気がした。

しかし、知りあって見ると、一口に医者といっても、小児科の臨床を志望する桜井と、精神科の基礎に進もうとする増田の間には、同じ職業の人間と思えぬくらい氣質のちがいがあった。

自から「出世の花道」を闊歩しているという桜井は、医者に一番大切なのは、「ためになる患者」を見分ける才能だと公言して、自分の俗物性をみとめるのを、むしろ正直な性格の現われと誇りにしていた。

「人間は元来、四つ足の動物だ。ただ人前で体裁をつくるために立ってみせている。」「人はだれでも一箇所はけちなところがある。これを長所として生かせば、出世できるんだ。」というのが、彼の口癖だった。

生活上彼の第一の関心事は損をしないことであり、寄港地の物売りにひとより余計金を払ったりとすると、自負心がまず傷つくらしかった。

しかし、その懸念がなければ、親切で、なかなか世話好きでさえあった。

船が次の港で、何時間（あるいは何日）泊るかが発表されると、それに合せて抜け目のない遊覧計画をたて、希望者を引率してでかけるのが、道楽であった。

始め、彼の無邪気なむきだしのエゴイズムに辟易した昌一も、そのうちに彼の注意をきいて、それにしたがっておくのを便利と思うようになった。

もし増田がいなかったら、香港からポートサイドまで、桜井の云うままになつてきたかも知れなかった。

ふだんは無口で、桜井の喋るにまかせている増田は、ときどき思いがけない頑固さで、自分の主張を通した。香港では、頂上まで日本人だけで行くのは危険だという桜井の意見を無視して、ひとりでもと、ヴィクトリア山に登り、ジブチでも、桜井の慎重論をおしきって、暗い海を原地人の操るサンパンにのつて上陸し、月に照らされた砂漠を見物した。

面倒くさがりで、他人のことはかまわぬくせに、好奇心が強く、それにひきずられるとほかのことを忘れてしまうところが似ている気がして、昌一は彼と大概一緒に行動した。

ひとが三人よれば、必ず見られる分裂と結合が四十日のうちに彼らの間にも生れていた。そこから見れば団長あるいは世話役は、桜井に違いなかったが、彼は二人の団員が、自分の心の働きの及ばぬ箇所、結びあっているのを感じ、この結合を尊重することで、自分の權威が保たれるのを知っていた。この均衡によって、三人は長い旅を無事に終ろうとしていた。

増田と昌一がもどると、車は橋をわたって、ノオトル・ダムのわきを通り、左折して川をこした。

「サン・ミシエルの広場だろう。ひどい廻り道だ。」

うしろの窓から、寺院の正面が遠ざかって行くのを眺めている二人に、桜井があてつけるように云った。

「いいじゃないか。パリ見物をしていると思えば。」

さっきからの昂奮が醒めぬ昌一が、強い口調で答えた。

「じゃあ、ぼられた分は払ってくれるね。」

桜井は唇をゆがめた。

「見たまえ、土囊がつんだままだ。」

増田が右側の窓を見ながら云った。

車はゆるやかな坂道をのぼっていた。両側の街はまだ人通りもなく、鍍戸をしめた店が多かったが、そのなかの幾つかは、入口に人の背より高く、土囊をつんでいた。ガラスに縦横の紙を張ったショーウィンドオも見られ、燈火管制に備えて、歩道の縁が白く塗ってあった。

「ミュンヘンの後片付けが、まだできていないんだね。」

昌一が云うと、

「このままにしておくつもりかも知れないよ。どうせ、またやるんだ。」

桜井は不機嫌に呟いた。

三人は半月前の不安な航海を思いだした。ミュンヘンの妥協が報ぜられたとき、彼らの船はコロンボにつく前だった。船の無線ではくわしいことはわからなかったが、事態が容易でないことは、戦争が勃発した場合、彼らが捕虜の扱いをうけることがあり得ると、事務長がなかば公式に告げたことでも察せられた。

ミュンヘン会議の話は、その晩、昌一を歓迎の夕食に招んでくれた藤村の口からでもでた。

高等学校で同級だったが、大学は途中でまごついた昌一より一年早くでた彼は、仏文学科で、西洋史の昌一とは専攻がちがったが、研究室が近いので、副手同士のときは、よく往来した。昨年、給費生の試験を通った彼は、パリで学校にせず、内職で金を稼いで、遊んでばかりいるという噂だった。昌一は仏文の教授から、内々その真偽をたしかめるように頼まれていた。

藤村も、彼のくるのを待っていたらしく、今朝ついたとき、日本館の玄関に出むかえてくれ、すぐ晩飯に招待した。

案内されたモンパルナスのはずれのレストランは藤村によると「この辺にしてはうまい」店ということだったが、床の絨毯の厚さといい、白布の上におかれた食器の重味や、給仕の態度など

から見て、かなり贅沢な料理屋らしかった。

藤村は顔馴染みらしく、黒服の給仕長や白い上衣の給仕たちを、隠語の冗談で笑わしたりした。

『こんなところが見せたいのかも知れないな。』と昌一は思った。

まわりには、少し着飾った感じの客たちが四五組いた。みな女づれで、男同士は彼らだけだった。

「ここは魚がうまいことになってるんだ。まだ牡蠣はまずいし、海胆うなぎもでないけど。かたつむりもいいよ。」

こう云って藤村は試すように昌一の顔をみた。かたつむりなら、船で食べたとき昌一は答えた。「それは罐詰だよ。生なまをひとつやってみる？　まるで味がちがうから。」

彼はおしつけるように云って、給仕をよんだ。注文がすむと、二人はあらためて、少しぎこちなく、むかいあった。彼らのあいだには、別々におくった一年の生活がよこたわり、話はずいぶんたまっていて、苦なのに、大きすぎる肉の塊をだされたように、どこから口をつけてよいか、わからなかった。

しかし糸口がほぐれると、同じ環境に育ち、同じ興味と利害に生きる者の、共感と反撥が濃く流れはじめ、白葡萄酒の酔いも手伝って、ときどき、あたりを憚らぬ大声になる自分を抑えねばならなかった。

「そうだよ、君たちは船のなかで、かえって呑気だったろうけど、此方は大変だった。予備兵が

次から次へ召集されて、総動員令がいまにも出そうだった。地下鉄は軍服で一杯だし、駅では女たちが泣きわめいている。ガスマスクの配給もしていると、いかいとかいう噂だった。むろん俺たち外国人にはくれやしない。いやだったね。こんなところで毒ガスにやられるのかと思つて。」

藤村は半ば目をとじて、苦笑いした。

「いざ自分の身を守らなきゃという時になったら、外国人どころじゃないだろう。」

昌一も相槌を打った。「東洋人となると、まったくの異人種だからな。」

「ふだん口ではいろいろきれいごとを云っていても、こういうときは、原始本能が顔をだすんだな。」藤村は何かを思ひだすようにゆっくり言った。「それに日本人はドイツ人の片棒をかつぐ奴と思われてるし。」

たしかにその通りだろう、と昌一は思った。船のなかでも、彼らにたいするフランス人たちの眼が一時險悪になり、冗談を言いあつていた若い下士官まで口をきかなくなったこともあった。

「しかし。」と彼は経験にさからう気持で言った。「日本人にだってヒットラーに反対の者はいゑる。そのくらいのことはわかるんじゃないかな。いくらフランス人でも。」

「そこまではなかなか考えやしない。十把ひとからげだよ。」

藤村は相手の無邪気をわらう調子で言った。

「たとえば、俺たちがフランス軍に志願したら。」

昌一は船のなかで、考えたことを口にだした。

「そういう外国人はたくさんいるらしいがね。イタリア人やドイツ人でも……」藤村もそれに関心を持ったことはあるらしかった。「しかし実際問題として、一番危い戦場にひきだされて、弾丸よけに使われるのがおちだろう。それでもいいというところまでお人よしになれば別だ。」

「でも日本にかえって兵隊にとられるよりましだろう。」

「主義に殉ずるというわけかい。」

冷笑が藤村の頬をかすめた。

「いや、己れの好むところにしたがうだけだ。少なくともそういう満足は得られると思うな。」少し酔ってきた昌一は主張した。

「そうかね、俺はフランス人どものために死ぬなんて、真っぴらだね。君、こんな奴等のために死ぬるかい。」

藤村は声高に言つて、あたりの食卓を見廻したが、客達の視線があつまっているのに気づくと、いくぶん声をおとしてつづけた。

「僕も来たところは、君と同じようなことを考えていたよ。でも一年生活してみても変わったな。フランス人が嫌いになったわけじゃない。かえって僕自身がフランス人に近い考えかたをするようになったんだ。フランス人はよその国のために戦うなんてことは絶対にしないからね。およそ徹底したエゴイストだ。国家だって彼らにとっては個人の生活の幸福を守るための道具なんだ。……この男を見たまえ。」藤村は右隣の卓子を眼で示しながら言った。そこでは灰色の髪に鋭

い眼付をした五十歳ぐらいの紳士が、二十歳まえの金髪の女と向いあって、彼女の顔をなめるように見つめながら、赤い葡萄酒のグラスをあげていた。

「この小父さんは、もうじきこの美人と寢床のなかで身体を重ねることしか考えていない。そしていま幸福の絶頂にいる。問題はこれを美しいと思うか、醜いと感じるかだ。」

「この二人は一体なんだろう。」

「さあ、金で買われた妾かも知れないし、夫婦か親子かも知れない。」

「へえ」

「いや此方には多いんだ、近親相姦が。」

藤村は、日本語なら、周囲にわかる筈はないと思うらしかった。

「しかし、そんなことが気になるようじゃだめだね。そういう事情はどうあれ、ここに向いあっている一对の男女の幸福を、素直に祝福できるかだよ、問題は。それが自然にできるほど自分の生活が充実しているかどうかだ。」

「じゃあ、君の生活は充実しているの？」

昌一の反問に、藤村は一寸言葉をとぎらせたが、

「うん、しているよ。少なくともそうなるように努力している。」
と断言した。

「それは結構だね。」

少し皮肉に聞えたのか、藤村はひらきなおって主張をのべはじめた。

大体フランス人は脂こい人間だ。フランス文学は、この脂くさい人間を、あくまで脂くさく追究した文学だ。とくに日本人から見た場合、この特色ははっきりする。だから、それを理解するためには、沢庵の尻尾を齧って本ばかり読んでいては駄目で、まず彼らの脂こい生活を体験して、できれば自分も脂こい人間にならなければならない。

パリにせつかく来ても大都市とソルボンヌを往復していたのでは、どれほど勉強しようと、頭の空虚な学者になるだけで、文学の背景にいくぶんでもふれるためには、セーヌ河を越えて、右岸のブルジョア達の生活を垣間見る必要がある。

要するに日本の文学は明治以来、書生と青年の文学だが、フランス文学は、大人の、市民の文学だ、その違いに気付かなくては、何事も始まらない、というのが、彼の議論の要だった。

「それで、君は学校へ行かずに、金儲けしちゃう遊んでるのかい。」

昌一は、日本できいた噂を無遠慮にぶつけてみた。

「うん、まあ、そうだ。」藤村はちょっと衝撃をうけた様子だったが、すぐ立直って答えた。「パリに在る間は、無理してもできるだけ派手に暮そうと思つてゐるな。それだけの値打ちのある場所だもの。」

「文学研究のため放蕩というわけか。」

「いや、そうじゃない、自分の俗物性をたしかめるためさ。きれいな女、うまい食物には勝てないからね。」

どことなく自慢の響きのする彼の言葉をききながら、昌一は藤村が方々に借金をつくって、友

人たちにもてあまされているという風評を思いだした。

「なるほど、そういう理窟もあるか。」

「理窟じゃない、実感だ。」と藤村は強い口調で反撥して、

「パリが僕の眼をひらいてくれたんだ。ここには欲しいものがたくさんあるし、それがなんでも金で買えるんだ。」

「われわれにもかい。」

昌一は相手が少し酔ったのに気付いた。出国以来、彼の肌に注がれた白人たちの、とくに若い女性の眼を思いだすと、藤村の言葉は誇張としか思えなかった。

「そりゃ端た金じゃだめだろうけど。」藤村は相手の氣持をすぐに察して答えた。「うんと金があれば、皮膚の色なんか問題じゃないさ。要するになんでも正札がついてるんだ。僕は金がほしいよ。大金がはいるなら、人殺しでもやりたいな。」

『大きなことを言ってる。』昌一は思いながら、相手の上気した頬を眺めた。藤村はしばらく話相手に餓え、日本の噂を氣にしているらしかった。

「だから僕は金儲けになることは何でもやるよ。人がどう言おうとね。ガイドの真似事でも、会社の臨時雇いでも。これで結構いそがしくて、学校なんかに行っている暇はない。

その代り十フランの金でも、使えばそれだけの味わいのあることは覚えたな。それでいいのだと思ってるよ」

彼の氣焰はいつか言いわけじみてきた。ふたりはかたつむりのあとで出た牛肉の皿を平げ、